

「二十人目ルール」

家の前まで来ると、クリームシチューの匂いがした。私は青年のことを考えていた。今日会った青年だ。面白い出会いだった。私が彼の「二十人目」だったのだそう
だ。

彼から声をかけられたのは、駅向こうの図書館から戻ってきたときだった。こんにちは、というのが彼の第一声だった。私のような年齢になると、老人をだまして有り金を吐き出させようとする者たちから、そんなふうに声をかけられることがままあって、もちろん警戒は怠らないのだが、青年のその声は何かとても感じがよかったから、私は振り返り、「こんにちは」と返したのだ。

「ただいま」

私は自室に上がる前に台所を覗く。

「今日はクリームシチューよ」

俎板まないたで何か刻んでいた娘の咲子さきこが、振り返ってニッコリ笑う。子供の頃は食べさせても食べさせてもやせっぽちで妻と心配したものが、もうじき五十になろうという今は、食べるぶんだけむっちりと身についている。

「うん、匂いでわかったよ」

「お父さんは本当に好きよね、クリームシチュー」

私は微笑ほほえむ。食事の前に風呂に入るかと聞かれたので、あとでいいと答えた。今日

は青年と喋なっていたので、いつもより少し帰宅が遅くなった。

一人娘の咲子とその夫の陽輔くんが購入した東京郊外の一軒家に、私は半年ほど前からやつかいになっている。もう年も年だし、ひとり暮らしは心配だからと呼び寄せてくれたのだ。仙台の家は今、売りに出している。なかなか買手が見つからないから、いずれもう少し売値を下げなければならないだろうが、売った金は自分の小遣いに少しだけ取って、残りは全部娘夫婦にやるつもりだ。

私は二階の四畳半を使わせてもらっている。廊下を挟んで向かい側は孫の夏郎の部屋だ。音楽が聞こえてくるから、今日はもう帰っているのだろう。夏郎は十八歳、第一志望の大学に落ちたので四月は少々ふてくされていたが、五月に入ったら元気になってきた。単純明快な性格は父親似だろう。シャイだが、なかなかやさしいところもあって、今どきにしてはいい子に育ったものだと思う。

私が和室に入ると、聞こえていた音楽の音量が少し下がった。それが孫流の「お帰り」の挨拶だ。

部屋にいてもすることもないから、下に降りていこうと思っていたところに、咲子が上がってきた。陽輔くんから電話があつて、今日は早く帰れるとのこと、久しぶりに食事が一緒にできるらしい。「だからあと二十分くらい待ってもらっていいかしら」と言うので、もちろんと私は答えた。待つのならその間に風呂に入ることにした。

ちようどいい。食事の前に、青年のことを考えられる。私は湯船に浸かってその容姿を思い浮かべた。はじめは高校生くらいに見えたが、話の中で二十二、三歳だということがわかった。幼く見えるのは人懐こすぎるような性格のせいかもしれない。古風なハンサムで、若い頃の佐田啓二に似ていたが、今どきの娘たちにはあまり好まれないのだろうという気がした。

少しお時間をいただけますかと青年は言った。おやおやこれはやっぱりセールスか、それとも宗教の類たぐいかなと思つたが、私は付き合つてやることにした。今日は図書館で目当ての本が予約でいっぱい借られず、つまらない思いをしていたので、この青年をからかつてやるのも面白かろうと思つたのだ。場合によつては、正しい道に導いてやることもできるかもしれない。

青年は私を、駅前百貨店の中にある喫茶店に連れていった。そこには以前一度だけ入つたことがあつた。東京都内だというのに、この町には喫茶店が少ない。いや、数だけはあるが、旨うまいコーヒー——仙台にいた頃、妻と鼻ひじ尻きにしていた店で飲むことができたような——を出す店は一軒もない。百貨店の二階の、洋服屋が軒を連ねる片隅になぜかぽつんとあるその店の佇たすまいに、私はかつて大いなる期待をしてドアを開けたのだつたが、コーヒーの味はまったく期待はずれだつた。しかし今日はコーヒーが目的ではないのだから、文句を言わずに青年に従つたのだ。

私も青年もコーヒーを注文した。私が「本日のおすすめ」のキリマンジャロを、青年がブルーマウンテンを（この店でそんな高い豆を選んだところで金の無駄だぞと私は心の中で言つた）。コーヒーが運ばれてくるまで、私たちは口を利かなかつた。私は、先に喋しゃべるべきなのは青年だと思つていたし、彼はどう言いだそうか考へている様子だつた。コーヒーが来て、私は一口飲み、顔をしかめて、「で？」と促した。「あなたは僕の二十人目なんです」と青年が言つたのはこのときだ。

「僕の、と言つたのかな？」

「そうです。僕は、僕の二十人をずっと数えてたんです。二十歳のときから。そして今日とうとう二十人目を見つけた。それがあなたです」

今度は私が言葉を探す番だつた。結局、もう一度眉をひそめただけだつた。やはり宗教の勧誘みたいなものだろうか。しかし続きを聞きたい気持ちにはなつていた。

「二十人目ルール、というものがあるんです」
と青年は言った。

服を着て出ていくと、ちょうど玄関のドアが開いて、陽輔くんが帰ってきた。お帰り。どうも。待たせてすみません。陽輔くんは片手を挙げてぺこぺこする。滑稽なふるまいだが、この男が「すみません」と言うときは心からそう思っているのだということを知っている。娘は彼女に似合いの、いい伴侶を選んだ。

母親から三回ほど呼ばれてようやく降りてくる夏郎を待つて、夕食がはじまる。テーブルの上には湯気をたてるクリームシチューの鍋とともに、トマトサラダ、青菜を炒めたようなもの、^{かき}茹の煮物が並んでいる。

テーブルクロスは白地にオレンジ、黒、くすんだ水色で、稲穂のような模様がプリントされている。新しく買ったのだろうかと考えるが、以前に見たことがある気がする。ずっと以前——仙台の家で、妻がまだ生きていた頃に。咲子が家の処分を手伝ってくれたときに、とっておいて使っているのかもしれない。

陽輔くんが私のグラスにビールを注ぎ、咲子がクリームシチューをよそってくれた。飲むのは私と陽輔くんだけだ。そのモッツアレラチーズはおいしいわよ、と咲子がトマトサラダのほうを指すので、それは自分で取り皿に取る。

「どう？」

「うん、おいしいよ」

「おいしいでしょう？ ネットで取り寄せたのよ。北海道で作ってるモッツアレラなの。シチューはどう？」

それで私はシチューをひとさじ口に運び、おいしいよ、ともう一度言った。

「おいしいと私も思うんだけど、お母さんの味にはかなわないのよね。かなわないっていうか、何か違うの。そう思わない？ お父さん」

私が答えを思いつく前に、「クリームシチューなんてそんなに複雑なものじゃないだろう」と陽輔くんが言った。

「単純だからこそ差が出るの」

わかってないのね、というふうに咲子は言い、「なるほど」と陽輔くんはあっさり納得した。私同様に、彼も食べることにはさほど関心がない。咲子の情熱は母親譲りだ。

「ルーを作るときの小麦粉の炒めかたとか、きつとそういうなのよね」

「ルーってインスタントじゃないんだ？」

陽輔くんが、かつての私と同じ失言をし、「もう！」と咲子はかつての妻と同じように眉を吊り上げる。

私は苦笑いした。陽輔くんに対してではない、じつのところ私は、クリームシチューがとくだん好きというわけではないからだ。どちらかといえば妻の好物で、それも私が思うに、食べるというより作るのが彼女は好きで、作るたびに「今日のはどう？」と聞かれるからおいしいおいしいと答えていたら、いつの間にか私の好物ということに家族内で認識されてしまったのだ。

「クリームシチューも旨いけどさ」

自分も何か言ったほうがいいと思ったのだろう、夏郎が話に加わってきた。

「俺はカレーのほうが好きだな」

もう！ ともう一度咲子が言って、でもその言いかたには自分の家族への愛情が滲みだしている。私はほっとしながら、孫のように私も言えたらなあ、と考える。

「お義父さん、今日も図書館に行っただけですか」

陽輔くんが気を遣って話しかけてくれる。

「行ったよ」

と私は答えるが、借りたかった本が借りられなかった話をしてもらえないので、青年の話をすることにした。

「今日、面白いことがあったよ。二十人目ルールというのに誘われたんだ」

それは自分の行く先々で「これと思った人」を二十人数えて、二十人目に声をかけ、バトンタッチする、というルールだ。青年が私に、そう説明した。

「これと思った人というのは？」

私はまず青年にそう聞いた。喫茶店にはピアノ伴奏だけの「イエスタデイ」が流れていた。

「目に留まった人。気になった人。数えるべきだと思った人。文字通り、これと思った人ですよ。ただし見知らぬ他人にかぎります。家族や友だちは選ばれません。有名人もだめです。あとになって、あれは有名人だったから目に留まったのだ、とわかった場合は、カウントを取り消すことになっています」

「その十九人には声はかけないのかね？」

「かけません。自分の心の中で数えるだけです。二十人目の人以外は」

「君もそうやって十九人数えてきたわけかい？」

「はい。僕が声をかけられたのは二十歳のときでしたから、三年かけて選びました」

「三年！」

「期間は決まっていなくていいです。一週間で二十人選んでもいいし、一日だっていい。一日で十九人を選んで、最後の一人はじっくり一年かけて選んでもいい」

私は、自分が青年に繰り出した質問と、彼の答えとを取り混ぜながら、食卓の家族に向かって説明した。私の説明は要所を押さえていて上手だったと思う。

「宗教みたいなもののかな」

私がおおかた喋り終えると、陽輔くんがそう言った。飲みますか？ というふうには私のほうへビール瓶を傾けてくれるが、首を振る。元々酒はきらいではないが強くはなくて、最近は食欲増進のために一杯飲めばもう十分な具合になる。

「私も最初はそう思ったんだがね。宗教じゃないんだ、ゲームだよ」

「ゲームにしても、あんまりかわらないほうがいいんじゃないですかねえ、そういうのには」

「危険はまったくないよ。今日会った男には私の住所も名前も聞かれなかったし、二十人目ルールに参加するかどうかは私が決めればいいことなんだから」

「そういえば青年の名前のことを考えていなかったな、と思いながら私は言った。」

「昔、似たようなのがあったわよね。不幸の手紙。同じ文面を書き写して二十人に出せていうの。そうしないと不幸になるって。私、書いたわよ」

ああそうだ、それがあったなと私も思い出した。咲子の元にそれが届いたのは彼女が六、七歳の頃で、そんなのは書くことはない、もらった人が迷惑するだけだぞと私が諭したら、でも不幸になっちゃうのはいやだ、と泣いたのだった。好きにやらせればいいじゃないのと、あとで妻に叱しかられた。夜、寝室でふたりきりになったときに。叱りながら妻は枕カバーを取り替えていた。そのカバーが、青い小花模様だったことははっきり覚えている。

「二十人じゃなくて十人じゃなかった？ いくらなんでも大変だろう、二十通の手紙を書くのは」

陽輔くんは不幸の手紙について言及してから、

「そっちはどうして二十人なんです？ その、声をかけるルールのほうは」

と私に聞いた。私はちよつと意表を衝かれた。どうして二十人なのか。そのことは思い至らなかった。どう答えればいいだろう。

「まあ、手紙よりは簡単だしね。すくなくとも十九人目までは。自分の心の中だけのことだから」

「ずるもできるし」

と夏郎が発言した。

「最初の方が二十歳の記念にはじめたとか、そういうんじゃないかしら」

咲子が言って、「なるほど」と陽輔くんはあっさりと納得してくれた。

“イエスタデイ”の次は“サウンド・オブ・サイレンス”だった。

喫茶店でかかっていた音楽の話だ。どちらも好きな曲で、レコードを持っていたし、サイモン&ガーファンクルはCDも買った。しかしオリジナルのメロディだけ借りてきてピアノでちゃらちゃらやられると、どうもだめだ。以前来たとき、もう二度と来るまいと思ったのはコーヒーの味だけではなく音楽のせいもあった。

「おかしな話だということはわかっています」

私の表情が幾分くもったせいかもしれない、青年はそう言った。

「君はどうして、この……二十人目ルールというのに参加する気になったんだい？」
会話を続ける意思を示すために私はそう聞いた。

「声をかけられたのが、ちょうど僕の二十歳の誕生日だったから」

そうだ、青年はそう答えたのだった。ルールの創設者について、咲子が洞察したとおりに。

「声をかけてきたのは四十歳くらいのおばさんだったんだけど、ちょっと嬉しかったんですよ、二十人目に自分が選ばれたってことが」

「その女性その……少し頭がおかしいとか、嘘を吐いているとかは考えなかった？」

もちろん君がそうである可能性もあるねと心の中で付け足しながら私は言った。

「こういうことって、なんかわかるじゃないですか。相手の表情とか話しかたで。嘘でも妄想でもないって。それに、まあ、そういうのもいいかかって思ったんです。ようするに信じるか信じないかは、自分の問題だと」

青年の眼はきらきらしていて、そのことはどのような判断のよすがになるだろうか、と私は考えた。

「それで、どうして私なんだね。こんなじいさんの、どこが君の目に留まったんだね」

「留まったんだから仕方がないですよ」

青年は軽やかに笑った。私もつられて笑った。いい答えだと思った。美点や存在感故に選ばれるわけではないのだ。ただそこにたまたま私がいた、そういうことなのだろう。

「私のひとり目を、もう選んできたよ」

私は言う。

「どんなひと？」

「女の子だった。十三歳くらいの……」

私は咲子の質問に答えようとするが、なぜか像がうまく浮かばない。喋りすぎてちよつと疲れてきたのかもしれない。クリームシチューの皿の中の鶏肉をスプーンですくって、また戻す。私はこの料理が「とくだん好きなわけじゃない」のではなくて

「あまり好きじゃない」のだと気がつく。

「喫茶店に入ってきたんだ。私と彼がまだ店にいるときに。母親と一緒に……」

「お母さんは数えなかったのね」

「数に入るような女じゃなかった」

うまく像が結ばないせいで、私の言葉は雑なものになり、夏郎がちよつとびっくりしたように顔を上げる。

「あれ？ さつき二階の店だって言いましたよね、お義父さん」

ビールから日本酒に替えて飲んでいる陽輔くんが言う。クリームシチューを食べながらよく酒が飲めるものだ。

「そう。駅前の百貨店の、二階の隅っこの小さな喫茶店だよ。つまらん店だがね」

「しかしあそこは少し前に潰れて、今は百均になってるんじゃないですか？」

私ははっとした。喫茶店に行かないとなれば若者むきのあの百貨店には何の用もないので、ずっと訪れていなかった。そうだったのか。

どう答えればいいかわからなかったので、私はシチューの皿に目を落とした。

「お父さん、それ、小鍋で温めてきましょうか」

顔を上げて咲子を見たとき、この娘はどうからわかっていたのだ、ということをは悟った。娘だけじゃない、あらぬほうを見ている孫もだ。それに今回だけじゃない、きつと毎晩私の話を聞くときは、いつもわかっていたのだ。

「だよなあ？」

陽輔くんが怪訝けげんそうに、妻と息子に同意を求める。もちろん彼は、私をやり込めようと思っているわけではない。ただ、私と夕食を同席する機会が咲子や夏郎ほどはない、というだけのことだ。

「なにか勘違いしてたみたいだ」

と私は小さな声で言った。

「お父さん、シチューがもう冷めちゃったんじゃない？」

陽輔くんがさらに何か言うのを遮るように咲子が言う。

「いや、いいよ。これを食べてしまうよ」

私はあらためてシチューをすくった。ごちそうさん、と呟いて夏郎が席を立つ。どうしていいかわからないのはこの子も同じで、だからこの場から逃げるのだろう。陽輔くんは、まだよくわかっていない顔をしている。

じつは、私はクリームシチューがきらいなんだ。うんとからい塩鮭でも焼いてくれれば、それでいいんだがな。今なら、そう言ってもいいような気がし、言えるようにも思える。だが結局は言わずに、生ぬるい鶏肉を、私は一生けんめい咀嚼そしゃくする。

（井上荒野著「二十人目ルール」2016年、朝日文庫、朝日新聞出版、
小説トリッパー編集部編『20の短編小説』所収）